

馬連2-13、およびフルーキーから総流し

木村拓哉主演の連続ドラマ『安堂ロイド』（TBS系、13日にスタート）の初回の平均視聴率が関東地区で

19.2

%、関西地区で

16.9

%（ビデオリサーチ調べ／以下同）というので、本気で驚いた。大ヒットした『半沢直樹』の後番組として大丈夫か？というムードの中、

19.2

%（関東）は及第点という評価のようだが、私としては「まさかの

19.2

%」である。

なにしろ、大宣伝がやたらとウザかったうえ、このタイトルのアホさ加減に、日曜の夜に、こんなドラマにつき合えないと思っていたからだ。

菊花賞が行なわれる今週の日曜日の夜、はたして第2回目が

どんな視聴率になるのか？興味津々である。



ところで、キムタクの役は、タイトルどおりアンドロイド。
番宣コピーにあるように、《2113年からやってきたアンドロイ
ド「ARX - 13」アールエッ
クスセカンドサーティーン》である。

となると、菊花賞はセカンドサーティーン=2-13の馬連1点
勝負
で決まりだろう。

こんな簡単な菊花賞は、最近ではありえない。



菊花賞は、3冠最終レース、距離3000メートルとあって、も

っとも悩むレースである。春のクラシック実績馬を取るか、夏の上がり馬を取るか？ また、長距離適正はどうか？ など、考え出したらキリがない。それが、こんな簡単でいいのか？

本来なら（昔の自分なら）、今年の菊花賞も、大いに悩まなければならぬ。

皐月賞馬ロゴタイプは疲労のため、ダービー馬キズナは凱旋門賞4着直後で参戦していない。そのため、押し出されるかたちで、皐月賞、ダービーともに 2着のエピファネアが主役になっている。しかし、このエピファネアには、距離の不安、折り合いの不安がある。そこで、皐月賞、ダービー勝ち馬不在の年は“春のクラシック不出走馬”が最近

3
回連続でVというデータが持ち出され、夏の上がり馬サトノノブレスなども人気を集めている。さあ、どうする？となるからだ。



しかし、はっきり書くが、長年競馬をやってくると、こういう話題は、記者たちがこれまでどおりの慣習のなかで、「まあ

、こんな話題でいいだろう」と書いているだけで、馬券にはなんの参考にもならないのがわかってしまう。もう、スポーツ紙の競馬欄のどんな記事を見ても、こういうふうにはしか思えなくなったのだから、ある意味で哀しい。

さて、これまでの経験から言うと、馬券にとってもっとも参考になるのは、馬の成績、レースの傾向など、競馬そのものとは関係ない話題のほうである。

そこで、今回、この関係ない話題を探すと、たまたまフルーキーがエピファネイアと同厩舎同生産牧場馬だということがわかった。しかも、馬名の意味は「まぐれ当たり」である。これは買ってみるべきではないだろうか？

というわけで、馬連2-13に加え、フルーキーから馬連総流しもやってみる。